

灯



4月といえば入学式や入社式。わが学園も新入生が入学するとともに、数人の新採用の教職員が入校し、それぞれに新鮮な活気を呈してくれている。

近年は大卒者の就活が耳目を集め、厳しい就職難と聞いているが、採用する側の

立場から見ると報道されているような就職難とは、かなり懸け離れた現実を感じている。

採用難



草野 義輔

わが学園では通常、多少他より遅く秋口から採用の情報を発信し募集を始めるのだが、なかなか思うようには集まらないのが実情だ。

前年度は例年並みの数人の新教員採用を必要とし、全国の大半の大学が加入しているユニキヤリアに求人登録するとともに

全国ネットの人材紹介会社にも依頼した。さらに九州管内の大学には個別に求人要項を送付し、かつハローワークにも求人を出した。それでも応募者はせいぜい2、3人といったところだ。

よほど採用条件が悪いのかとも思うが、新卒での教員初任給は20万円余り。各種手当もあり、退職金制度もある。

賞与は公立学校と同じ支給率である。加えて既卒も大いに可である。就職難であればもう少し応募が

あっても良いと思うのだが、地方で過疎化・少子化の中にある小さな私学に応募する学生は少ないのだろう。そうだとすればここにも地方と都市部の深刻な格差が潜在していることになる。就職難どころか採用難、が私の実感である。(昭和学園高校理事長・日田市)